百々裏話（91）

おもてあきら

◎謡初雑考（その四）

順序が逆になってしまったが、ついでに、室町期の謡初についても概観しておきたい。

室町幕府の謡初の起源は明らかでない。幕府政所代だった蜷川親元の『親元日記』寛正六年（一四六五）正月四日の条に、

……御成、…還御。即於二殿中一御一献佳例、観世大夫以下役人祇候、歌初也。

とあるのが謡初（ウタイゾメ・ウタイハジメ。歌初・謡始とも書かれている）に関する最も古い記録で、それ以前のものは知られていない。将軍は足利義政、観世大夫は四代の政盛の時で、応仁の乱の二年前である。正月四日は武将たち（元日に参賀接見を許されている）の他に医師・陰陽師・通事・観世大夫らも拝謁を許される日であった。その参賀の儀式が終り、恒例の風呂始めに伊勢伊勢守邸へ将軍が赴き、還御後の殿中御一献の際に、観世大夫らによる謡初が行われたというのである。

これだけでは、謡初の具体的内容も、それが恒例行事化していたかどうかも明らかでなく、同じ頃の別の記録がほしいところであるが、当時の日記類には不思議に謡初関係の記事が出て来ない。『親元日記』も寛正六年だけだし、『斎藤親基日記』の寛正七年や翌文正二年の正月四日の記事も、参賀対面のことを言うのみである。『後鑑』も、寛正六年に『親元日記』を引いて「四日…渡二御伊勢守貞親亭一、御風呂始也、還御後有二御謡初一。」とある以後、永正四年（一五〇七）まで謡初関係の記事が見えない。恐らくは、評定始とか的始（弓始）ほど公的な恒例行事ではなかったため、稀にしか記録されなかったのであろう。

しかし、謡初が足利将軍家の新年の行事として、応仁以前に恒例化していたのはほぼ確かなようで、応仁の乱後に義政将軍時代の慣習を模範として編まれたらしい武家故実書の類には、謡初に関する言及がしばしば見られる。群書類従所収の書から若干引用すると、まず『長禄二年以来申次記』の正月四日の条には、観世大夫らの参賀接見の作法を詳述した後に次の如くある。

一、今日二於三間之御厩一献在レ之。一番衆申沙汰。仍一番之頭細川淡路左京亮入道一人伺公也。御相伴衆は無伺公一なり。御供衆事は皆々被レ参也。観世伺公仕てうたひ申也。

一、御服。於三三間御厩一被レ下レ之。一番之頭細川淡路左京亮入道。

一、御服同被レ下レ之。一観世大夫。

名こそ用いていないが『親元日記』の歌初に該当することは明瞭であろう。細川淡路守成春は文明十二年に御伴衆に加わり（細川系図）同十七年五月没（蔭涼軒目録）であるから、文明後半頃の謡初の状態を記録したものと見られる。観世大夫のみならず、一献の申沙汰をする一番之頭（御伴衆の筆頭者らしい）も将軍から御服を拝領している点が注意される。

また、『年中定例記』正月四日の条には、

一、応仁之乱前までハ、今日うたひぞめとて、御会所にて、一番の番頭一献被レ申、一献始也。観世大夫、同四郎、両人祇候いたし、うたひを申候し也。両人御服被レ下。唐織物。ぞめもの。又一番の番頭嘉例の舞あり。御服をり物拝領。常徳院御代まで大夫祇候いたし、うたひ申候。御服被レ下候。近年面むき一献なし。

とある。常徳院足利義尚が没した延徳元（一四八九）年以後の記事であるが、謡初が応仁以前に恒例行事であった事を明言しているのみならず、一献始を含む全体を謡初と称していること、観世大夫と四郎の両名が祇候し、両人とも御服を拝領していること、一番の番頭の嘉例の舞があったこと、足利義尚の頃から一献始が略されて謡初だけになったらしい

ことなど、幾つかの興味ある言及を含んでいる。大夫とともに祇候している観世四郎は、四郎が世阿弥の弟以来観世座のワキのシテの通称らしいことを考慮すると、金剛座から観世座へ移った坂戸四郎権守(金剛四郎次郎)かと思われる。彼の子の彦次郎が足利義尚に寵愛されて侍に取り立てられ、広沢を姓としたのは有名な話であるが、そうした縁で坂戸四郎権守は将軍の後援を得ていた。観世大夫の他に四郎や四郎左衛門や小四郎が参加している後年の慣習が、坂戸四郎権守の時代に初まることも、十分考えられよう。

永正・大永頃の慣習を記録したらしい『公方様正月御事始之記』になると、

正月四日、御謡始。観世大夫、同四郎左衛門、致二祇候一、従二右京大夫一進上之御扇に御織物之御服を被二相副一候て被下候。同四郎左衛門には、御織物之御服を給候也。……先御扇を遣、さて御ふくを渡候時、大夫給、則いただき申、やがてうたひ申候。其後四郎左衛門に御小袖遣候。是は御服バかりなり。音曲をも不レ申候。例年此分にて候也。

と、かなり具体的である。一献始や番頭の嘉例の舞には全く言及しておらず、古法とは変っていることが明瞭である。細川右京兆が扇を進上するのが一献始の名残の風習かも知れない。観世大夫の謡は御服拝領後らしいが、これも古法のままではあるまい。乱後に中絶が繰返されるうちに、主体であった一献始が廃絶し、御服下給が中心の観を呈する謡初に変貌してしまったらしい。

以上は武家故実書に基づいての考察であるが、永正以後になると謡初に関する直接的な記録も幾つか見られ、大むね右の引用のような形で謡初が行われていたことが知られる。たとえば、『後鑑』永正四年(一五〇七)正月四日の条には、「武雑例」を引いて、

大夫出仕之式日也。雖レ然、大夫依レ無レ力不レ致二出仕一、小四郎一人祇候。仍嘉例之御服之事如レ常被レ下レ之。然ニ大夫拝領之御服之事、貞忠へ被レ遣レ之。彼より可レ被レ遣候由上意也。貞宗之仰言には被二送遣一事は近比珍敷御事也。但就二上意一不レ及二是非一。

とある。欠勤した観世大夫にわざわざ御服を送り届けてやるというのは確かに異例のことであったろうが、それと言うのも、観世大夫に御服を下給することが謡初の主要目的化していたからであろう。一人出仕した小四郎とは観世座ワキ方の観世四郎左衛門の初名である。『蜷川親俊日記』にも天文七・八・十一年等の謡初の記事が見えるが、特に変った点はない。『伊勢貞助記』の天文十三年(一五四四)正月四日の条に、

御音曲初アリ。但大夫ハ不レ致二祇候一、四郎左衛門音曲申レ之云々。大夫ニ被レ下御服ヲバ被レ下云々。

と見えるのが、永正四年の場合と比較して興味深い。同書(『後鑑』所引の分)の永禄六年(一五六三)の記事が、室町幕府の謡初に関する記録として、管見では最後のものである。日は一貫して正月四日であった。どのような曲を謡ったのか資料はないが、江戸幕府の謡初に観世大夫が四海波の小謡を謡ったのは、室町期の伝説を踏襲したものではなかったろうか。

なお、室町期の謡初は、別に将軍家の独占ではなかった。本願寺では『証如上人日記』の初まる天文五年以降、毎年、正月二日に謡初が行われている(別に能も演じられた)。身内が集まり、寺内の堪能の者が謡ったようで、玄人は参加していない。有力な大名の所で行われた可能性も十分考えられよう。臨時の催しだったらしいが、天正十一(一五八三)年正月四日には禁中でも「御うたいはじめ」が新中納言兼勝を大夫にして行われている(御湯殿上日記)。江戸期の謡初が徳川幕府に於いてのみならず各大名家でも催されたのも、室町期の風習と関係があるのかも知れない。

(47・4・6)